

令和 7 年 1 月 30 日

福岡県教育委員会教育長 殿

所属校名 宗像市立河東西小学校  
職・氏名 教諭 廣 渡 祐 宇  
指導者名 教諭 中 河 原 絵 里

## 研 修 最 終 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

### 記

- 1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡小学校研修員
- 2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡小学校  
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号  
TEL (092) 741-4731  
FAX (092) 741-4744

### 3 研究主題及び副題

重要な語や文を選び出して読む第1学年国語科学習  
～情報説明型言語活動を位置付けた単元構成を通して～

### 4 研究主題及び副題についての説明

#### (1) 主題設定の理由

##### ア 社会の要請から

令和3年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』構築を目指して」において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要であると述べられている。さらに「子供が『個別最適な学び』を進められるように、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくこと」が求められている。そこで、本研究では、子供が自分たちの興味・関心に沿った学びの過程の中で、言葉の意味や働き、使い方等に注目して言葉と言葉の関係を問い直し、他者と協働しながら知識を相互に関連付けて深く理解したり、情報を精査しようとしたりすることができるようにする。このことから文章を読んで知り得たことを相手に発信できるような言語活動を通して、子供が文章中から自分の興味・関心に合った語や文を友達との対話を通して選び出す学習は、主体的に文章と関わる中で文章の構造を正確に捉えたり発達段階に応じて系統的に読解力の向上を図ったりする上で意義深いと考える。

##### イ 福岡県の児童の実態から

令和5年度全国学力・学習状況調査小学校国語では説明的な文章を読むことに課題が見られた。特に、「情報と情報との関連付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し、使うことができる問題」では、福岡県の正答率は全国の正答率より0.3ポイント低い。これは、事実と感想、意見等との関係等、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を選び出すことができていることが原因である。つまり、目的に応じて書き手の伝えたい内容を正確に捉えることや読み手として必要な情報を適切に見付けることに課題があると考えられる。福岡県の課題を克服する点でも、第1学年の段階から系統的に「知識及び技能」である情報と情報との関係と「思考力、判断力、表現力等」である文章構造とを関連付けて重要な語や文を選び出すことは意義深い。

## (2) 主題の意味

重要な語や文を選び出すとは、図1のように、子供が文章全体の内容と自分の体験や既有的知識を結び付けて読み、特に興味・関心をもった情報の中から、「詳しく知りたい」、「詳しく知らせたい」という事柄を知らせるために必要な語や文を見付け出し、決めることである。その際、「問い」の文を視点として「答え」を見付けることや時間的な順序、事柄の順序など、文章の構造に対する理解を基に、書き手が述べている各段落に書かれた中心となる名詞や動詞の意味など、文章全体に書かれている内容を大まかに把握し、題名や見出し、写真などを手掛かりにして、それらを見付け出し、決めることができる姿を目指す。

重要な語や文を選び出して読む第1学年国語科学習とは、様々な教材における文章の中から子供が興味をもったことに対し、「詳しく知りたい」、「詳しく知らせたい」という事柄について、重要だと考えられる語や文を文章の構造を基に見付け出し、決める力を身に付ける学習である。

文章の構造を基に、重要だと考える語や文を見付け出すためには、説明されている事柄の順序や関係を捉えることが必要となる。図2のように、子供は、第1学年という発達段階から、まず、各段落に書かれている内容を順序に着目しながら把握した上で、全体の構造を把握していく。例えば、「問い」の段落と同じように、「答え」についての段落も全て同じ順序（教材「じどう車くらべ」においては、「しごと」と「つくり」が同じ接続詞である「そのために」で接続されていること）になっていることを捉えること等が挙げられる。そこで、「知識及び技能」(1)情報の扱いに関連する事項における「共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること」と、「思考力、判断力、表現力等」(2)ア「構造と内容の把握（説明的な文章）」における「時間的な順序や事柄の順序等」とを関連して学習過程に位置付けることが重要である。具体的には、①事柄と事柄を比べ、共通する点を見付けたりする（共通）こと、②共通した視点を基に事柄と事柄の様子や特徴について相違している点を見いだしたりする（相違）こと、③複数の事柄が一定の観点に基づいて順序付けられていることを認識することである（図3）。そこで、本研究では、以下のような子供の姿を目指す。

- 読書に親しみ、必要な知識や情報を得ることができることを知り、共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる子供（知識及び技能）
- 文章全体に書かれている内容の大体を把握し、文章の中の事柄に関わる重要な語や文を考えて選び出すことができる子供（思考力、判断力、表現力等）
- 興味があることについて読書を行う中で、粘り強く言語活動に取り組み、言葉がもつよさを感じながら、進んで感じたことや考えたことを伝え合おうとする子供（学びに向かう力、人間性等）



図1 子供が重要な語や文を選び出す姿



図2 文章の構造（じどう車くらべ）

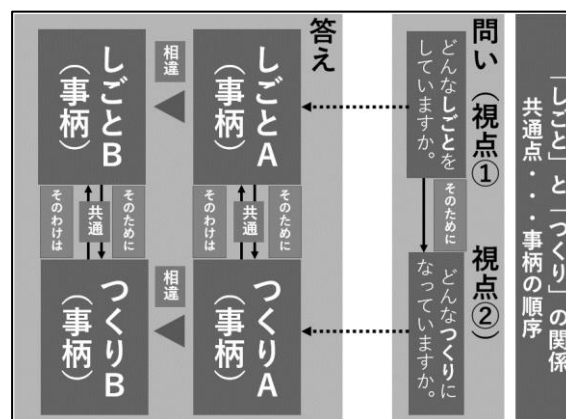


図3 情報と情報との関係の例

### (3) 副題の意味

情報説明型言語活動とは、子供が、説明的文章を読んで「詳しく知りたい」「詳しく知らせたい」という事柄について図鑑やカードなどの表現物に表すことで文章の構造を捉え重要な語や文を見付け出す活動のことである。子供の思考力、判断力、表現力等が生かされる課題解決の過程となるよう、教科用図書の特性や子供の実態や興味に合わせた言語活動を、単元全体を通して一貫したものとして位置付ける（図4）。

そして、表現物に示す言葉を吟味していく中で、共通となる事柄の順序を把握し、自覚的に、内容の大体を基に重要な語や文を選び出して読むことができるようになる。そのために、導入段階では、表現物を作成するための学習課題を設定する活動を位置付ける。そして、単元の展開段階の中には、2段階の「説明活動（説明活動①、説明活動②）」を位置付ける。説明活動①では、教科用図書について、表現物に書きまとめる活動を通して、文章や写真（挿絵）、題名などを生活経験とつなげて話し合い、教材の内容について興味を高めたり、大まかな構造を把握したりすることができるようにする。次に、説明活動②では、教科用図書を基に得た、複数の情報をつなげて読む観点とし、その観点に沿って図鑑から知らせたい情報を選び出し、表現物に書きまとめることができるようにする。終末段階では、図鑑を基に作成した表現物について

友達と振り返り、自分が選び出した語や文が文章構造に合ったものになっているという自覚を促し、重要な語や文と文章構造の関係について理解を深めることができるようにする（図5）。例えば、9月教材『じどう車くらべ』は、自動車の種類ごとの「しごと」に合った「つくり」について共通の順序で説明された教材である。そこで「つくり」に関してすごいと思ったことや驚いたことを選び出し、その理由について話し合う活動を踏まえた上で、「しごと・つくりぴったり図鑑カード」に書きまとめる活動を設定する。このことにより、理由を話す中で、「しごと」との関係性を捉え、内容を具体的に想像した説明を行うことができ、図鑑カードを書く際の観点を取得することにつながると考える。

### (4) 仮説実証のための着眼

#### ア 考えと理由を説明する活動

考えと理由を説明する活動とは、図6のように子供が「すごい」「驚き」を感じた言葉【考え】を書き出し、その言葉を選んだ【理由】を話し合う活動のことである。理由を話すことによって、文章における情報と情報との関係や事柄の順序を問い直したり、捉え直したりすることができ、重要な語や文について具体的に捉えることができる。子供が「不思議」や「驚き」を説明するために重要だと思った言葉を選び出したり、その理由について文章の構造を基に、内容の大体を話したりすることができるようにするために、考えた理由を説明する文章の数や説明の回数を重視し、子供が自分の考えと理由について重要な語を使いながら説明する体験ができるように場の設定をする。

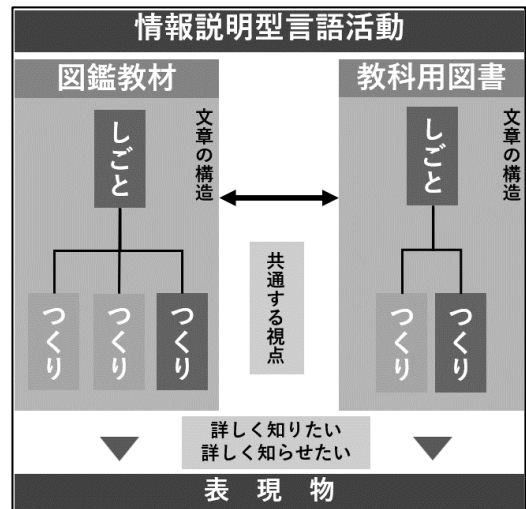


図4 情報説明型言語活動の仕組み

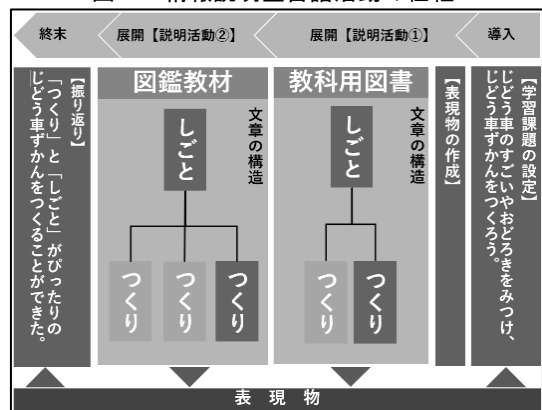


図5 単元構成の例

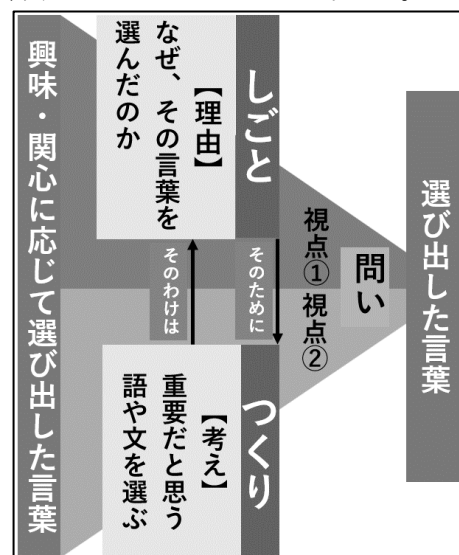


図6 考えと理由を説明する活動

## イ 観点取得を促すモデル文の提示

観点取得を促すモデル文とは、子供の説明の目的に応じて時間的な順序や事柄の順序による説明の仕方や、写真を使った説明の仕方など必要な情報を調べることができるように子供が書きまとめる言葉について吟味した上で選択することができるような情報を加えた文のことである。読み手として必要な情報を適切に見付ける上で重要になる語や文を捉えることができるように、事柄について過不足がある文章を提示したり、類語を比較する活動の場を設定したりする。また、モデル文を比較提示する際、「どちらがよいか」「それはなぜか」「あなたはどちらを使いたいのか」といった発問と組み合わせることで子供が興味・関心に応じた言葉を選び出すことができるようにする。さらに、「この言葉があるよさは何か」といった発問と組み合わせることで選び出した言葉について解釈を引き出すことができる。

## ウ 説明内容と説明方法の理解を促す図鑑を活用した読書活動の設定

説明内容と説明方法の理解を促す図鑑を活用した読書活動とは、子供の興味や関心等の目的に応じた選び出しと図鑑の説明内容、説明方法とを関連付ける読書活動のことである。例えば「生き物の不思議」など一貫したテーマで説明する読書活動によって教科用図書の教材文から図鑑に読み広げ、説明内容と説明方法を捉えることが想定される。このような図鑑の教材化を年間を通して意図的に配列することで子供が自ら言葉を選び出すことができるようにする。

6月教材『うみのかくれんぼ』を取り扱う場合は、説明に要する文の数を3文から5文にしたり、教科用図書と同じ「場所」「体」「隠れ方」の文章の構造にしたりする等、図鑑資料を教材化する。9月教材『じどう車くらべ』では、①教科用図書と同観点で、同じ文の形態から、そのまま選び出す、②教科用図書と同観点で、同じ文の形態から、特に重要だと考える語や文を決めて選び出す、③教科用図書とは異なる文の形態から、特に重要だと考える語や文を決めて選び出す、という三段階に分け教材化を行う。最後に1月教材『どうぶつの赤ちゃん』では、「生まれたばかりの様子」と「大きくなっていく様子」の2つの観点を埋め込んだ図鑑資料を教材化する。比較を重視し、教材から子供が重要な語や文を自分で選び出すことができるようにする（図7）。

### (5) 研究のねらい

第1学年国語科の読むことの学習において、内容の大体を基に重要な語や文を選び出して読む子供を育てるために、図鑑資料を活用し、重要な語や文を使って選び出した理由の説明を行う言語活動を単元の中に位置付け、その有効性を究明する。

### (6) 研究の仮説

第1学年国語科の読むことの学習において、図鑑資料を活用し、重要な語や文を使って選び出した理由の説明を行う活動を単元に位置付けることで、説明文の文章構造を捉えたり、興味・関心に応じて説明したいという意欲が高まったりし、内容の大体を基に重要な語や文を選び出して読む子供が育つであろう。

備考 ○ 在籍校と電話番号 宗像市立河東西小学校 TEL (0940) 34-1233

| 図鑑教材を活用した読書活動     |                                                               |                                                                                                                    |
|-------------------|---------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教科用図書             | 教材化                                                           | 具体例                                                                                                                |
| どうぶつの赤ちゃん<br>(1月) | ○「生まれたばかりの様子」と「大きくなっていく様子」の2つの観点による文章構造<br><br>○課題を経て新たに考えたもの |  カバ<br>生まれたばかりの様子<br>大きくなっていく様子 |
| じどう車くらべ<br>(9月)   | ○「しごと」「つくり」の目的と因果の関係となる文章構造<br><br>○類似した例を出す                  |  じどう車<br>しごと<br>つくり             |
| うみのかくれんぼ<br>(6月)  | ○「場所」「体」「隠れ方」の1つの目的に対し3つの観点が並列に示された文章構造<br>○説明に要する文の数は3文から5文  |  アサヒガニ<br>場所<br>体<br>隠れ方       |

図7 図鑑を活用した読書活動

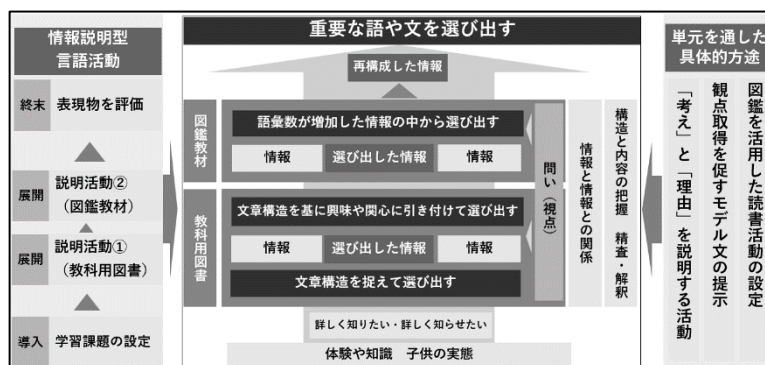


図8 研究構想図

## 5 指導の実際（10 月実証）

(1) 単元名 第 1 学年「とっておきのひみつをえらびだそう『じどう車くらべ』『ずかんシリーズ』」

### (2) 単元の見目標

- 事柄同士の共通点や相違点を見付けたり、事柄の順序を考えたりすることで、情報と情報との関係について理解することができる。 (知識及び技能)
- 自動車の「しごと」や「つくり」などの事柄の順序を考えながら内容の大体を捉え、重要な語や文を考えて選り出すことができる。 (思考力、判断力、表現力等)
- 自動車に関する図鑑を進んで読み、選り出した言葉を基にすごいと思ったことや驚きを感じたことについて友達と伝え合おうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

### (3) 計画（8 時間）

ア 教材文『じどう車くらべ』を読み、「問い」と「答え」の関係について話し合う。 2 時間

イ 教材文の中の自動車について、重要な語や文を選り出すための観点について話し合う。 3 時間

ウ 図鑑を読み、選り出した事柄と選んだ理由を友達に説明する。 3 時間（本時 1 / 3）

### (4) 単元の見説

第 1 学年単元「とっておきのひみつをえらびだそう『じどう車くらべ』『ずかんシリーズ』」の学習において、次の 3 つの手立てを行うことによって、重要な語や文を選り出して読む子供が育つであろう。

- 「しごと」と「つくり」の観点の基に「考え」と「理由」を説明する活動の設定【着眼ア】
- 「しごと」と「つくり」の観点の取得を促すモデル文の提示【着眼イ】
- 「しごと」と「つくり」の文章構造から説明内容と説明方法の理解を促す図鑑を活用した読書活動の設定【着眼ウ】

## (5) 指導の実際

### ア 導入段階（第 1・2 / 8 時）

導入段階では、自動車の「すごい」や「驚き」を見付け、とっておきの自動車図鑑を作ろうという単元を貫くめあてを設定することをねらいとした。そのために、題名や写真から自動車について知っていることや生活での経験を想起しながら話し合う場を設定して、題名や複数の自動車の写真を提示し、自動車の「しごと」や「つくり」に関して興味をもつことを促した。その上で「じどう車くらべ」を読み、バスや乗用車、トラック、クレーン車についてすごいと思ったことや驚いたことについて話し合う活動を設定した【着眼ア】。さらに、教師が作成した図鑑を提示し、自動車の「すごい」や「驚き」を見付けたい、とっておきの自動車図鑑を作りたいという意欲を高めるようにした【着眼ウ】。

#### 考察 1

導入段階において「じどう車くらべ」を読み、自動車の「すごい」や「驚き」を話し合ったり教師が作成した図鑑を提示したりことは、自動車の秘密を選り出すという見通しもつことに有効であった。その根拠は、自動車ごとに「すごい」や「驚き」の感想を数多く話し、「私もとっておきの自動車図鑑を作りたい」と発言したりする姿や、図鑑にまとめる観点を取得したりすることにつながったからである。

### イ 展開段階（第 6 / 8 時）

展開段階では、バスや乗用車、トラック、クレーン車に関してすごいと思ったことや驚いたことを話し合い、図鑑に書く活動を行うことで「じどう車くらべ」における「しごと」と「つくり」の文章の構造を捉えたり、とっておきの「すごい」や「驚き」を見付けることができるよう言葉を絞り込んだりすることをねらいとした。トラックでは、資料 1 に示すのモデル文の提示を行った【着眼イ】。さらに、モデル文の提示をした後に、「狭い荷台だと何が困るのか」ということを子供たちに問いかけた。すると、「狭い荷台だと、荷物を少しづつしか運ぶことができない。荷物をたくさん運ぶ仕事をするためには、広い荷台の方がいい」と発言した。トラックの荷台の「つくり」が広いことのよさと、トラ

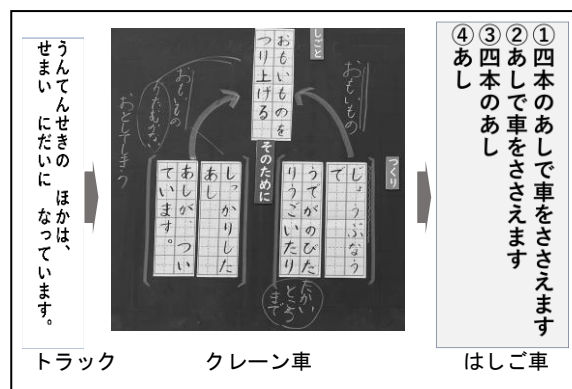
ックの荷物を運ぶという「しごと」を関連付け、文章の構造を捉える姿が見られた。またクレーン車では、「おもいものをつりあげる」という「しごと」に対してどの「つくり」がすごいかを選ぶことができるモデル文の提示を行った【**着眼イ**】(資料①)。「じょうぶなうで」を選んだ子供は、「じょうぶなうでが無いと、重すぎる荷物を吊り上げることができないから、このつくりがすごいと思った」と理由を述べた。さらにはしご車では、語彙数が異なるモデル提示を行った(資料①)。その上で、「あしがあるとどんなよいことがある?」と問いかけた。すると「あしがあると車が倒れないし、人を安全に助けることができてすごいと思う」と理由を述べた。このように、文章の構造を捉えることや根拠を明確にして言葉を選び出すことができるように、モデル文の提示を単元を通して段階的に行った。また図鑑教材においては教科用図書と同じ文章の構造になるよう教材化を行った(資料②)。そして図鑑提示を「じどう車くらべ」の「しごと」と「つくり」の構造を捉えた上で行ったり、様々な車の教材化を行ったりしたことで、共通する事柄の順序に着目しながら読書活動の効果を高めることを促した【**着眼ウ**】。そして、図鑑教材を読み、すごいと思ったことや驚いたことを選び出し、その言葉の理由について話し合う活動の設定を行った。その際、子供が自分の考えと理由について重要な語や文を使いながら、説明する体験ができるように話し合う場の設定を行った。

## 考察2

展開段階において「しごと」と「つくり」の文章の構造を捉えること、とっておきの「すごい」や「驚き」を見付けること、言葉を絞り込むというねらいに合わせ単元を通して段階的にモデル提示をしたことは、有効であったと考える。その根拠は、資料③に示すように子供が「すごい」や「驚き」を説明するために、根拠が明確となる言葉を絞り込んで選び出し、その理由について選び出した言葉を基に話していたからである。

## (6) 全体考察

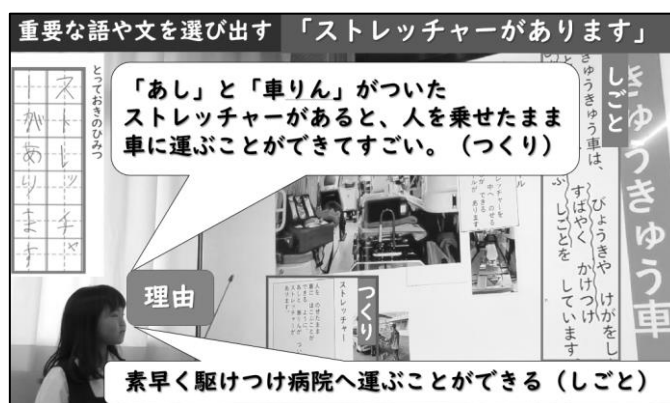
教科用図書の共通教材において根拠を明確にした言葉を選び出した子供は100%だった。さらに「しごと」と「つくり」の文章の構造に基づいて考えの理由を述べていた子供は、83%、興味や関心に基づき考えの理由を述べていた子供は17%だった。このことから語彙数の異なるモデル文を比較提示し、「もしも～のつくりがなかったら何が困るだろう。」「～のつくりがあるとどんなよいことがあるだろう。」と問いかけ、言葉の比較を促すこと活動を単元に位置付けたことで重要な語や文を選び出すことができたと考える。しかし、図鑑教材において根拠を明確にした言葉を選び出す子供は30%となり課題が残った。原因として、図鑑教材において文の数の増加、教科用図書と図鑑教材の形式の違いがあると考えられる。そこで、教科用図書と図鑑教材において文の数に大きな差が生まれないようにしたり、形式に差が生まれないようにしたりする教材化の工夫が必要であると考えられる。



資料1 観点所得を促すモデル文



資料2 図鑑を活用した読書活動



資料3 根拠を明確にし言葉を選び出す姿